

# 伊賀良宮ノ先

埋蔵文化財発掘調査報告書

1978.3

長野県飯田市教育委員会

# 伊賀良宮ノ先

埋蔵文化財発掘調査報告書

1978.3

長野県飯田市教育委員会

## 序

農業構造改善事業に伴う遺跡発掘調査は、過去数年に亘って実施してきたが、その都度先人の残した貴重な文化遺産のすばらしさに触れることができ、遺跡、遺物を大切に保護、保存し、或は記録として残してゆく重要さを感じているものであります。

今回は昭和51年度事業として発掘調査を実施した。三日市場中島平地籍のすぐ隣の台地で下の城ともいわれている宮の先遺跡の調査を行った。

この一帯は水田、桑園、果樹園などの耕地であったので、農業構造改善事業の関係者と十分協議を行ない、地形的な調査を行なったうえで重点地区を設定して実施した。時期については秋の収穫後に実施せざるを得ない状況であり、調査期間も長く経費も相当要したが、調査関係者、地元関係者、事業実施主管の農林課関係者の協力によって所期の目的を果すことができた。

調査団長の佐藤勉信氏、調査員吉沢輝人氏と指導に当られた大沢和夫、今村善興の両氏、調査期間中発掘に当られた作業員の骨折に感謝し、尚佐藤氏は図版や写真のほか出土品の整理保存などに意を用い、立派な報告書をまとめられたことに対し、深甚なる謝意を表し、本調査事業に関係した各位に厚くお礼申し上げます。

昭和 53 年 3 月

飯 田 市 教 育 長

林 研 二

## 例

## 言

1. 本書は昭和52年度第2次農業構造改善事業に伴う飯田市三日市場下ノ城地籍宮ノ先遺構の発掘調査報告書である。
2. 本書は報告書作成の期限があり、このため調査結果について十分な検討、研究がされず、資料提供と問題提示の報告となっている。
3. 編集及び執筆は佐藤が担当した。
4. 写真は佐藤が、遺構実測図作成は佐藤・吉沢・牧内住子が、遺物の作図は佐藤、製図は田口さなえ・佐藤が担当した。
5. 遺構実測図のうちピット内、または横に記してある数字は床面からの深さをcmであらわし、縮尺は図示してある。
6. 遺物は飯田市考古資料館に保管してある。

## 目

## 次

序	1
例 言	2
目 次	2
I 環 境	3
1. 自然的環境	3
2. 歴史的環境	3
II 発掘調査経過	7
III 発掘調査結果	10
(I) 遺構・遺物	10
1. 弥生時代後期住居址	10
2. 方形周溝墓	12
3. 中世遺構群	15
4. 土 壊	20
遺 物 図	21
IV 考 察	22
図版 I・遺跡 II 遺構・遺物 III スナップ	
調査組織	
おわりに	

# I 環 境

## 1. 自然的環境

宮ノ先遺跡は飯田市三日市場下ノ城地籍に所在する。三日市場は飯田市合併前は伊賀良村三日市場であった。伊賀良地区は飯田市街地の南南西にあって、木曾山脈の前山、笠松山(1325m)、鳩打峠(1173m)、高鳥山(1398m)の東麓に位置し、北の飯田松川と南の茂都川(久米川の支流)の強い押し出しによって広大な扇状地が発達し、伊賀良地区の中央部の大部分がこの扇状地にあるといえよう。この扇状地の中央部の東端に三日市場がある。

北はアマツラ沢を隔てて下殿岡の伊那谷第二段丘の平坦な面が東に長くのび、南は中村区へと扇状地が連なり、西は木曾山脈の前山からの扇状地が大瀬木区から続いてきているが、東は扇状地の先端部となって複雑な地形を呈している。

宮ノ先遺跡のある下ノ城は三日市場の中心部の東にあって東西600m、南北100～150mの西から東にのびる舌状の台地をなし、北は比高差25mの新川の浸蝕谷となり、東は新川の氾濫堆積の低地帯となり、高距約20mで飯田市駄科新井原地帯となる。西は高距約20mの段丘座をもって一段高まり、伊賀良扇状地面がひろがっている。この中央部を臼井川が東流し、三日市場中部で南東に流路を変えて浸蝕を深めている。この臼井川の北で高距20m余、下ノ城は15m前後の高距をもって伊賀良扇状面から細長く丘陵状に東南東に台地がのび、さらに東へ起伏をもちながら伊那谷第1段丘の臼井原(標高556m)の残丘面に続いていく。

宮ノ先遺跡の微地形をみると、北は新川の浸蝕谷によって切られ、新川を隔てた舌状台地に立地する中島平遺跡を見下し、西は伊賀良扇状地の東端部となる三日市場の神社(奥位神社)の東から高距15～20mの緩い傾斜面をもって下ノ城地籍へと下がり、平坦な舌状台地をなしている。しかし、西から続く扇状地からのびる丘陵は南から東南東へと続き、この丘陵に沿っての両側の地形は低地帯となり、東にいくに従い深まり、平坦面との高距は西で2m、東で9mを測り、新川の旧流路を示し、湿地帯となっている。

この湿地帯は古くからの水田地帯であり、新川の浸蝕崖端部近くに縄文時代から弥生時代の集落が展開されたものとみられる。また、台地の西端部に下ノ城城跡があり、新川の浸蝕崖と、崖端浸蝕を利用し、さらに人工の空堀によって築城がされていたが、かつて道路工事の際、城跡は削りとりられ、僅かに空堀跡を残すのみとなっている。

## 2. 歴史的環境

伊賀良地区の遺跡を概観すると、木曾山脈の前山の山麓には、茂計川上流の矢平では弥生後期と平安時代の遺跡として知られ、孫兵衛屋敷・牧平・火振原では縄文早期押型文土器の出土をみており、各時期の包蔵量も多い。北にきて佐久良社付近遺跡があるほかは高位にある遺跡は今のところ発見されていない。扇状地上方の遺跡には笠松山の北の山裾にある立野遺跡は縄文早期押型文土器の標準遺跡である。この他縄文前期・中期・後期の土器の出土もみている。立野の一段下に山口遺跡があり、縄文前期末の土器が標

- 1. 郊外/水田
- 2. 中野/水田
- 3. 下/水田
- 4. 上/水田
- 5. 大野/水田
- 6. 大野/水田
- 7. 野/水田
- 8. 上/水田
- 9. 野/水田
- 10. 野/水田
- 11. 野/水田
- 12. 野/水田
- 13. 野/水田
- 14. 野/水田
- 15. 野/水田
- 16. 野/水田
- 17. 野/水田
- 18. 野/水田
- 19. 野/水田
- 20. 野/水田
- 21. 野/水田
- 22. 野/水田
- 23. 野/水田
- 24. 野/水田
- 25. 野/水田
- 26. 野/水田
- 27. 野/水田
- 28. 野/水田
- 29. 野/水田
- 30. 野/水田
- 31. 野/水田
- 32. 野/水田
- 33. 野/水田
- 34. 野/水田
- 35. 野/水田
- 36. 野/水田
- 37. 野/水田
- 38. 野/水田
- 39. 野/水田
- 40. 野/水田
- 41. 野/水田
- 42. 野/水田
- 43. 野/水田
- 44. 野/水田
- 45. 野/水田
- 46. 野/水田
- 47. 野/水田
- 48. 野/水田
- 49. 野/水田
- 50. 野/水田
- 51. 野/水田
- 52. 野/水田
- 53. 野/水田
- 54. 野/水田
- 55. 野/水田
- 56. 野/水田
- 57. 野/水田
- 58. 野/水田
- 59. 野/水田
- 60. 野/水田
- 61. 野/水田
- 62. 野/水田
- 63. 野/水田
- 64. 野/水田
- 65. 野/水田
- 66. 野/水田
- 67. 野/水田
- 68. 野/水田
- 69. 野/水田
- 70. 野/水田
- 71. 野/水田
- 72. 野/水田
- 73. 野/水田
- 74. 野/水田
- 75. 野/水田
- 76. 野/水田
- 77. 野/水田
- 78. 野/水田
- 79. 野/水田
- 80. 野/水田
- 81. 野/水田
- 82. 野/水田
- 83. 野/水田
- 84. 野/水田
- 85. 野/水田
- 86. 野/水田
- 87. 野/水田
- 88. 野/水田
- 89. 野/水田
- 90. 野/水田
- 91. 野/水田
- 92. 野/水田
- 93. 野/水田
- 94. 野/水田
- 95. 野/水田
- 96. 野/水田
- 97. 野/水田
- 98. 野/水田
- 99. 野/水田
- 100. 野/水田

- A. 大野/水田
- B. 中野/水田
- C. 下/水田
- D. 上/水田
- E. 大野/水田
- F. 大野/水田
- G. 大野/水田
- H. 大野/水田
- I. 大野/水田
- J. 大野/水田
- K. 大野/水田
- L. 大野/水田
- M. 大野/水田
- N. 大野/水田
- O. 大野/水田
- P. 大野/水田
- Q. 大野/水田
- R. 大野/水田
- S. 大野/水田
- T. 大野/水田
- U. 大野/水田
- V. 大野/水田
- W. 大野/水田
- X. 大野/水田
- Y. 大野/水田
- Z. 大野/水田



图1 宮ノ先遺跡地形図及び周辺遺跡分布図 (1:20,000)

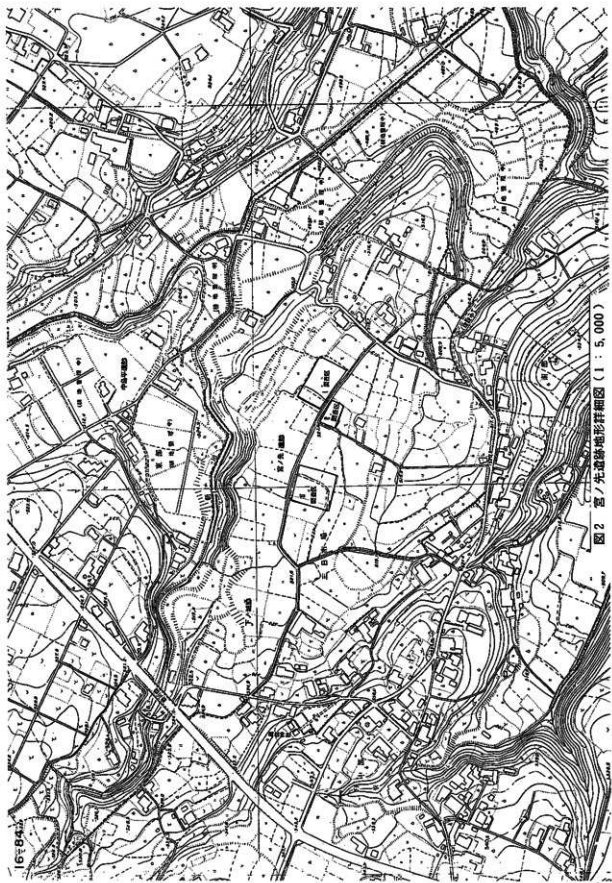


圖 2 富 / 先遺跡地形詳細圖 (1 : 5,000)

式となっている。この付近から南に続いて縄文前・中期の遺跡は多い。

中央道は扇状地中央を通過しており、その遺跡発掘調査<sup>(2)</sup>では、ようじ原・上の平東部・寺山・六反田・大東・酒屋前・滝沢井尻・小垣外・辻垣外・三壺淵・上ノ金谷の11遺跡が調査され、縄文時代では小垣外遺跡で前期末住居址と土壌群、中期では上の平東部・酒屋前・滝沢井尻・辻垣外・小垣外で加曾利E期の住居址が発掘調査され、小垣外では後期の良好な資料も見られている。弥生時代後期では大東・酒屋前・滝沢井尻・上の金谷で住居址が発掘され、良好なこの期の資料を得ており、滝沢井尻の方形周溝墓より鉄剣2口の主体部出土は注目される。古墳時代では三壺淵・上の金谷で住居址が発見され、平安時代では六反田・滝沢井尻・小垣外・三壺淵・上の金谷で住居址が検出され、小垣外では緑釉陶器の出土をみており、中世では酒屋前を中心に集落の存在も予想され、良質な中世陶片の出土をみている。

扇端部から段丘面にかけては、扇状面の浸蝕も深まり、台地上の水利は悪く、遺跡は川に面す所に立地する傾向を示しているが、この面での調査は西の原遺跡<sup>(3)</sup>以外にはなく、ここでは縄文中期勝坂期の住居址3が発掘され注目されている。

宮ノ先遺跡周辺をみると、遺跡は新川に面した段丘端部に多く、特に新川の浸蝕崖下に見下す新川とその支流アマツラ沢の間に形成された低位舌状台地の中島平遺跡<sup>(4)</sup>は1976年の農業構造改善事業に伴う発掘調査で縄文早期末・前期末の住居址各1、弥生後期住居址15、古墳時代中・後期住居址各1と中世住居址2の他土壌57基を検出し、各期の良好な資料を得ており、径2m余の円形の土壌44号では、その底部より有舌ポイントの出土をみ、注目されている。

中島平の北アマツラ沢を隔てた北の殿岡面端部には縄文中期の遺跡の市場屋敷・公文所遺跡があり、宮ノ先の西の扇状面には、はりつけ原・大原、南には丸山遺跡があり、経塚原へと続いている。はりつけ原遺跡は縄文中・後・晩期、古墳時代の遺跡として知られ、都市計画街路知久町一中村線(飯田中央道)の工事の際、未調査に終わっているが、工事終了後の掘削切採り面に住居址2が検出され、遺物が発見できずその時期は不明であった。宮ノ先の南東、臼井川に面した浸蝕谷に須恵器の窯址土器洞(かわらけぼら)がある。

<sup>(5)</sup>伊賀良地区の古墳は43基があげられている。残存するものは9基であり、石室は破壊され、墳丘を僅かに残すにすぎないものが大半である。古墳分布は松川に面す扇端部、新川の兩岸の段丘端部、茂都計川に面す段丘端部に東西方向に並んでいる。その他散在する古墳が僅かにみられる。多くは新しい時期の古墳とみられ、規模も小さい。宮ノ先周辺では、北の殿岡面に新川に面した段丘端部に市場屋敷・公文所・狐塚・大塚古墳が並び、南の丘陵には、丸山1号・2号墳、日陰古墳がある。それより南に経塚原、大畑古墳があり、大畑古墳は伊賀良地区で最大の古墳でほぼ完存し、壘電鍍の出土で知られ、内部構造は不明であるが、古い古墳ともみられる。

伊賀良地区は古代東山道育良駅の所在地ともみられているが、それに対する確証はない。伊賀良の庄の名は平安時代にあられ、文献によれば中村・久米・川路・殿岡の諸郷が含まれ、松川以南、阿知川以北の電西一帯とみられ、中世末には伊那南端の新野まで伊賀良庄と記されているが、その中心が伊賀良にあったものとはいえない。

鎌倉初期伊賀良庄の地頭は北条時政であり、時政以後は北条氏一族江馬氏が代々そのあとをついで地頭となっている。江馬氏は伊賀良庄内に在住し庄務を行ったものでなく、多くの在地の代官にあたらしていた。その代官の分明したものに四条金吾頼基<sup>(6)</sup>があり、殿岡に住したことは文献上明らかである。頼基は江馬氏の重臣であり、日蓮の信者として知られている。

<sup>(7)</sup>北条滅亡後、小笠原氏が信濃守護職となって来住し、小笠原氏の力によって伊賀良井の開発が行われ、伊賀良地区の大開発が進んだ時期とされている。伝承によれば、伊賀良の要所に小笠原氏の武将が配置さ



れ、下ノ城跡もその居城の一つとされている。

- 注1. 神村透「立野式土器の編年の位置について(1)M2M3」信濃20の10・12 21の3  
 注2. 「長野県中央埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 一 飯田地内その2」昭和47年度  
 注3. 伴信夫・宮沢恒之「長野県飯田市伊賀良西ノ原遺跡発掘調査報告」信濃19の12  
 注4. 飯田市教委「伊賀良中島平」1977  
 注5. 市村成人「下伊那史 第二巻」昭30  
 注6. 宮下 操「下伊那史 第五巻」昭42  
 注7. 筒井泰蔵「室町時代の伊賀良」伊賀良村誌 昭48

## Ⅱ 発掘調査経過

第2次農業構造改善事業飯田市伊賀良地区の昭和52年度計画は三日市場下ノ城地籍において実施されることになった。下ノ城は宮ノ先遺跡として知られており、このため工事に先立って発掘調査を行ない記録保存することになったのが今次調査である。事業計画面積は7.1haの広面積であるが、南側は旧新川流路とみられる低地帯の湿地と、北側の新川の浸蝕崖の傾斜面が含まれているが平坦面は5haの広面積が調査対象となるが、期日、費用の制約のため遺跡の主要部とみる地点を調査し、その他は工事中パトロールすることにした。昭和52年9月29日に現地を下見し、調査重点地区（Ⅰ調査区）2,000㎡を設定した。発掘調査は11月22日より12月19日まで行ない、この間Ⅱ・Ⅲ調査区を設け約5,000㎡について発掘調査し、この間工事の進行も早く、工事中のパトロールも平行して行なわれた。

### 発掘調査日誌

月・日	天候	日誌
11.22	くもり 時々雨	器材運搬、準備
23	くもり	休み
24	晴	テント張り Ⅰ調査区にグリッド設定 住居址とみる黒土の落ちこみ検出
25	晴 うすくもり	土壌1号、1号住居址を確認 中世遺構検出 1住の覆土粘土質でねばり苦労する
26	くもり	1住、土壌1号掘り上げ 規模は大きくなり拡張作業
27	雨・晴	日曜日休み
28	晴	2住・3住検出 調査 (終日排土作業)
29	晴	調査 - 粘土で苦労 1住、土1号測量。調査 - 屋敷跡となる
30	晴 風強く寒い	調査 - 規模大きく、深い 調査 - 囲炉裏を検出 3住掘り上げ 柱穴を掘る
12.1	晴 朝凍る	調査 - 床面に達し、炉址検出 掘り上げ、写真、測量 4住・5住検出、調査(中世)

月・日	天候	日誌
12. 2	朝雨・晴	完掘、測量、3住測量 調査、4住の集石調査測量 Ⅱ調査区ブルドーザーで表土排除、調査するが遺構なし、また周辺の水田にピット調査するが遺構なし。
3	晴、朝凍る	4住・5住完掘 Ⅲ調査区をブルドーザーで表土排除、調査、溝発見
4	晴	日曜日休み
5	〃あつなかい	溝調査 — 北側に東西方向にのびる浅い溝とこれより南にのびるを検出
6	〃	溝調査 — 南に向くは方形の規模は大となる。浅溝は西で南に折れ方形となる
7	〃	溝調査 方形周溝プラン検出 外周溝北溝より中世陶片数点検出 4住・5住測量
8	〃	方形周溝基Ⅰとなり周溝調査、断面図をとる 粘土質が掘るに苦労
9	晴時々時雨	周溝掘上げ 主体部検出 外周溝の西溝南より東に入る大溝検出調査
10	晴	主体部調査 外周溝内側の調査 調査、南側の盛土ブルで排除 大規模の方形周溝となる
11	晴	日曜日休み
12	くもり・晴	方形周溝基Ⅰ完掘、測量 方形周溝基Ⅱを検出、調査、大方形周溝調査 外周溝内側の調査 粘土のため苦労
13	晴・寒い	土壌群と柱穴群を検出 完掘、方形周溝基Ⅲ検出 調査 掘上げ
14	晴	完掘測量 測量 周溝掘上げ
15	くもり寒い	大方形周溝、内側の調査、柱列を検出。Ⅲ調査区全遺構測量
16	小雨	柱列の調査 — 中世遺構となる
17	雨・午後晴	休み
18		日曜日休み
19	朝雪荒れ 晴	内部調査、写真、測量、現場作業を終える。 器材、テント撤収

その後、遺物整理、実測、製図をなし、報告書作成にとりかかる。

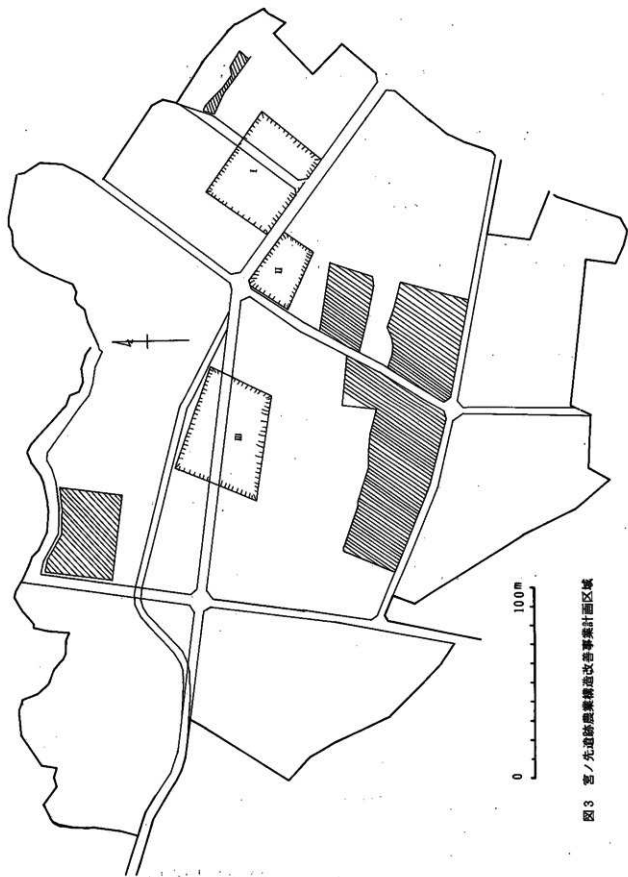


图3 宫/先道徐殿寨村改造带寨计画区域

### Ⅲ 発掘調査結果

#### (I) 遺構・遺物

宮ノ先遺跡で発掘調査した遺構は次のようである。(図4・5)

弥生時代後期住居址	3
方形周溝墓	3
中世遺構群	2
土  墳	13

遺構はⅠ・Ⅲ調査区で見えられ、Ⅰ調査区に続く農道を隔てた南の水田のⅡ調査区は予想に反し遺構はなく、その東に続く水田のピット調査でも遺構は見えなかった。Ⅰ調査区の東に続く畑は一段低くなり、かつて壁土の採集地となった所である。また西の水田の調査でも遺構発見はできなかった。

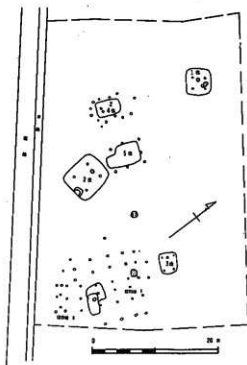


図4 宮ノ先遺跡遺構図Ⅰ(Ⅰ調査区)

#### 1. 弥生時代後期住居址

##### 1号住居址(図6)

Ⅰ調査区の北西に発見され南北3.75m×東西4.05mの隅丸方形をなし、ルーム層に55~58cmの深さに掘りこむ竪穴住居址である。覆土は暗黒色の粘質土でねばり、調査に苦勞した。北東壁より20cmはいて土墳1号が掘りこまれており、ルームの盛上げが覆土中にみられ、後のものと認められた。床面は堅く、支柱穴は4こが整った配置にあり、

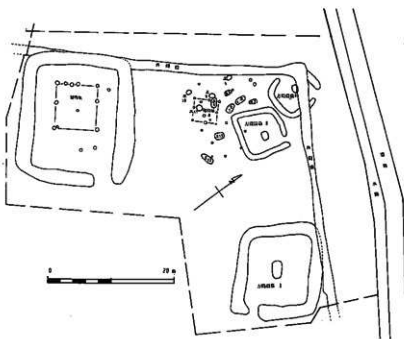


図5 宮ノ先遺跡遺構図Ⅱ(Ⅲ調査区)

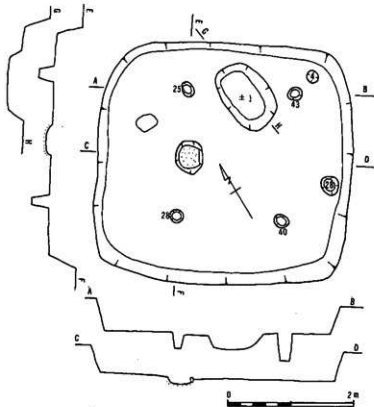


図6 宮ノ先1号住居址、土坑1号

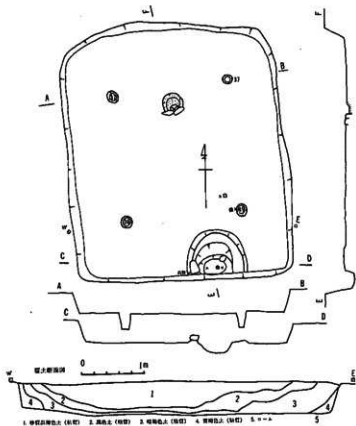


図7 宮ノ先遺跡2号住居址

炉址は西側の柱穴間の中央にあつて東側に枕石1こを置く地床炉である。

遺物は僅少であり、粘土質の覆土のため土器はもろく剥げている。弥生後期の小片である。石器の出土はない。

### 2号住居址 (図7)

I調査区の中央南側に発見され、南北6.5m×東西5.3mの隅丸方形、ローム層に深さ50cm前後掘りこむ竪穴住居址である。覆土は断面図にみるようであるが、粘質でねばり、調査には苦勞した。床面は堅く、主柱穴は4こ、整った配置にある。炉址は北側の柱穴間の中央部よりやや内側に入っており、南側に枕石2こを置き竈口縁部(図17の1)を埋壺炉としている。南壁の中央部から東に寄って出入口または貯蔵穴とみる周囲にロームを盛った掘りこみがつく。この内部より竈口縁部(図17の2)と壁について石徹(図17の7)の出土をみている。

遺物(図17の1~7)土器は弥生後期座光寺原式の壺と小形壺の出土をみている。1の壺の口縁部は炉壺に使用されたもので、中島式にみる立上り口縁帯部はなく、口唇部を肥厚させ、そこに縦の沈線をめぐらしている。口縁部から頸部にかけて波状文が、その下に腰状文が施されている。2の壺の口縁部は立上り口縁帯部を欠いた痕跡を残し、口縁部から頸部に細い条痕が施されており、1・2ともに

類例の少ないものである。3は壺の胴下半部で胴部は強く張るとみられる。4の小形甕は口径8.4cm、高さ10.1cm、最大径は肩部にあり、頸部はしまって口縁部は斜めに立ち上がっている。焼成は強く、肩部に部分的に縄文が施され、内外面とも赤褐色を呈す。東海系の土器である。石器には7の石剣がある。硬砂岩製で長さ15.2cm、刃部幅9.9cm、重量345g、刃部幅の広いところに特色がある。

### 3号住居址(図8)

I調査区の中世屋敷址の北に隣接し、1号住居址の南東24m、2号住居址の東14mにある。南北2.65m×東西3.30mの隅

丸長方形をなし、ローム層に30cm前後の深さに掘りこむ小形の竪穴住居址である。床面は強く、主柱穴は4こ、炉址は西側の柱穴間の中央より僅か南に寄っており、円形の地床炉である。

遺物は弥生後期の土器片1点のみであり、住居址の形態からみて、この期の住居とみられる。

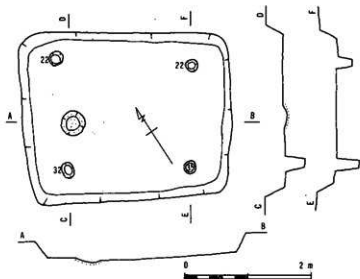


図8 宮ノ先遺跡3号住居址

## 2. 方形周溝墓

### 方形周溝墓I号(図9)

III調査区の東端に発見され、北側は中世遺構群II外周溝が僅かにかかって上のにのっている。南北13m×東西15mの隅丸方形に周溝をめぐらし、その東南隅を僅か北に寄って陸橋がつく。周溝幅は最大220cm、最小幅130cm、平均幅180cm前後、深さローム層に65cm~96cm、平均80cm前後に掘りこむ規模の大きなものである。主体部はほぼ中央部にあつて、140cm×270cmの隅丸長方形をなし、ローム層に深さ55cm掘りこむもので、主軸方向はN54°Wをさす。

周溝及び主体部の覆土は断面図に示すようであり、中間に木炭を多く含む黒褐色土層があり、そこより炭化木の出土もみている。それより下層は極めて粘質な覆土のため調査には苦労した。

遺物(図17の8・9)は僅少で、周溝出土に8の高坏脚部片と9の小形の磨石斧が図示できるもので、9は基部を欠くが整った給刃をなす。その他土器小片数点の出土をみるが、粘質土中の出土のため器肌は荒れているが、弥生後期のものとみられる。北溝と周溝内側より山茶碗片数点と中世陶片の出土をみている。主体部より縄文中期末加曾利E式土器小片数点と打石器(刃部を欠く)1の出土をみ、混入品とみられるが、主体部を縄文中期末の土壌とみた方がよいかも知れない。建物址IVの形態からして、中世遺構とも考えられるものである。

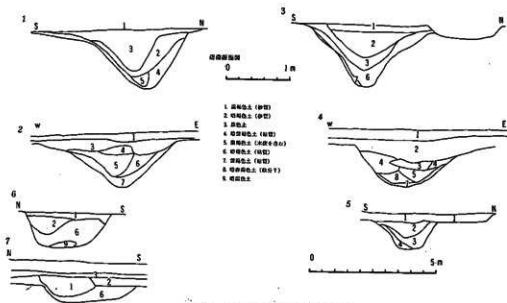
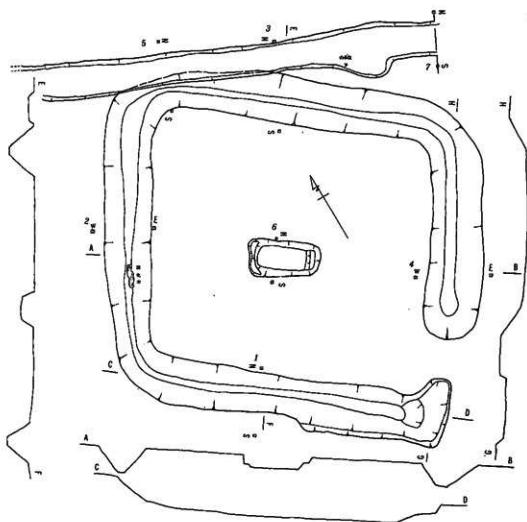


圖9 宮ノ先遺跡方形周溝墓I

方形周溝墓Ⅱ号 (図10)

Ⅲ調査区の北隅に発見され、南40cmに方形周溝墓Ⅲ号が隣接する。中世遺構群Ⅱ外周溝が東溝と西溝の一部を切っている。南北7.8 m×東西7.1 mの隅丸方形に周溝をめぐるし、北隅と西溝のほぼ中央部と陸橋2こをもつが後者は中世外周溝に北側は切られている。周溝幅は平均80cm余であるが最大幅は120cmローム層に30cm前後の深さに掘りこむ周溝である。主体部はほぼ中央部にあって、南北径100cm、東西径142cmの楕円形をなし、深さ52cmローム層に掘りこむ土墳であり、主軸方向N74°Wをさす。

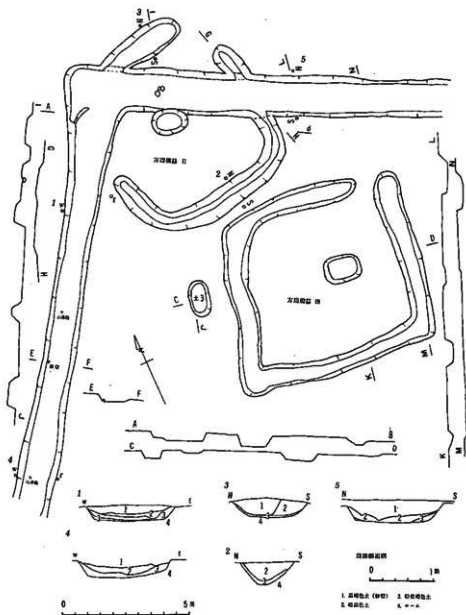


図10 宮ノ先遺跡方形周溝墓Ⅱ・Ⅲ、土墳3号、外周溝北西溝一部



遺物は発見されなかったが、周辺の状態からみて弥生後期の構築とみられる。

#### 方形周溝墓Ⅲ号(図10)

方形周溝墓Ⅱ号の南40cmに隣接してあり、南北7.5m×東西7.7mの隅丸方形に周溝をめぐらし、北東隅に陸橋をもつ。周溝幅は70cm～90cm、深さ10cm前後と浅い周溝である。主体部は中央部よりやや東に寄っており、南北110cm×東西150cmの隅丸方形をなし、ローム層に深さ30cm掘りこむ土換で、主軸方向N80°Wを測る。遺物は発見されなかったが、方形周溝墓Ⅱ号と同時期の弥生後期と考えたい。

### 3. 中世遺構群

#### 中世遺構群Ⅰ — 屋敷址 (図4・11・12・13)

I調査区の南半分に15m×25mの範囲に広がる遺構群である。南は水路と道路となり東は壁土採取地となった所で南と東への広がり是不明である。発見された遺構は3間×4間と、2間×2間の建物址と竪穴をもつ4号、5号住居址よりなる遺構群である。遺構群の範囲は表土(耕土)の直ぐ下層にあって、全面はタタキ状となって堅く一耕作者の話では、この畑は何を作ってもできは悪く、少し早が続けば作物は萎れてしまい、水田にしても作柄の悪い所であった、とのことである。一このタタキ状の堅さによって知ることができた。遺構の中心をなすのは独立の建物址I号で、北側に98cm×120cmの隅丸方形深さ45cmローム層に掘りこむ囲炉裏をもち、南側には二重構造をなす南北1.2m×東西3.3m、深さ20～30cmの竪穴と、南北3.1m×東

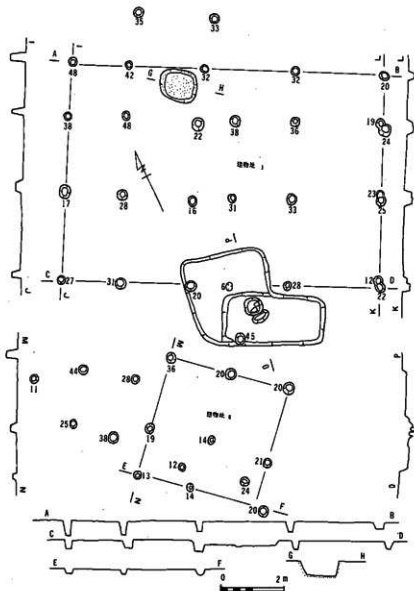


図11 宮ノ先遺跡中世屋敷址

西 2.65 m, 深さ10~15cmの竪穴がカギ形状につき、内部には焼土はなく、建物址Ⅰの柱列が通って付いている。この竪穴の南に建物址Ⅱ号があり、その西側に柱穴5こが発見されている。南に続くとみる柱列は水路と道路のため不明である。

建物址Ⅰ・Ⅱの方向は、Ⅰ号はN70°W, Ⅱ号はN50°Wと主軸方向を異にするが床面のタタキ面の連続は同一建造物に含まれるものとみられる。

建物址Ⅰ号のすぐ西は水田造成時に削られ不明であるが、西13mに5号住居址があり、さらにそれより4.5mに4号住居址があって、共に建物址Ⅰと同一方向にある。4号住居址(図12)は南北4m×東西2.4mの隅丸長方形をなし、緩いカーブをもってローム層に25~30cm掘りこむ竪穴住居址である。柱穴は竪穴をとりまく状態に竪穴外にあり、内部にも4こがみられるが外部の柱穴につながるものは2こである。内部に人頭

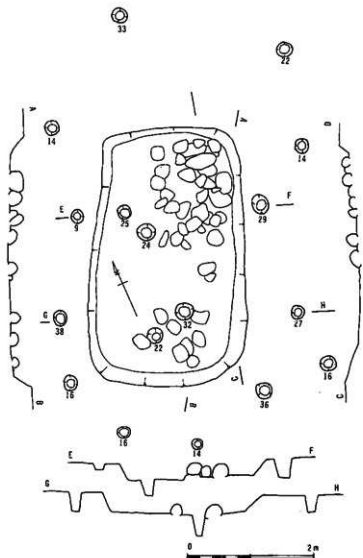


図12 宮ノ先遺跡4号住居址

大の石40こ近くが床面に接して不規則に置かれ 廃屋墓ともみられたが、中世火葬墓群にみられる骨灰・木炭はなく、土壌も掘りこまれていない。集石の性格は把握するにはいたらなかった。

5号住居址(図13)は4号住居址の東4.5mにあり、南側3分の1は東西1.9m, 北側は3.3m×南北5.5m, 南側は深さ10cm前後、北側は一段下がって20cm前後とローム層に掘りこむ二重構造をなす隅丸方形の竪穴住居址である。柱穴は竪穴の外周に7こが整った配置にあり、柱列は4号住居と並び、建物址Ⅰ号にも並ぶ。東壁より25cmはいり、中央部より北に寄って楕円形の掘りこみがあるが焼土はない。

4号・5号住居址とも焼土はなく、遺構群中、焼土をもつのは建物址Ⅰの囲炉裏のみである。

遺物(図17の26~28)には中世陶器片と基焼片、青磁碗片等の出土をみているが、図示できるものには、26・27の囲炉裏内出土の青磁の輪花碗と磁石があり、28の天目茶碗は5号址出土である。図示外に常

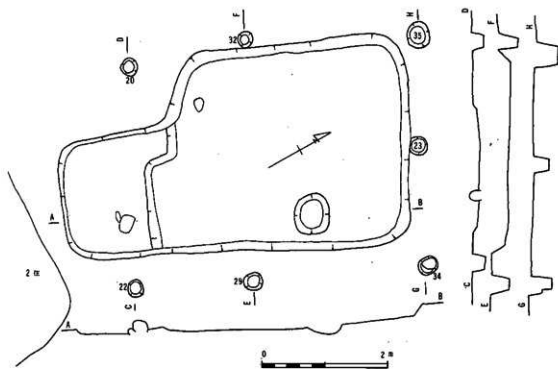


図13 宮ノ先遺跡5号住居址

滑盤片、行基焼の壺頸部片、山茶碗片があり、その他天目茶碗、古瀬戸の小片、スリ鉢の小片がある。中世遺構群Ⅰはその規模から、量的には少ないが良質な中世陶磁器があり、タタキ状の床面からみて、下ノ城跡に関連する有力武士の屋敷址とみるが妥当と思われる。

#### 中世遺構群Ⅱ (図5・14・15・9・10)

Ⅲ調査区全域にわたって発見され、さらに南と東に延びているとみるが、水田造成時に削られていた。外周溝をめぐらし、その内側に建造物が構えられていたものとみられる。発見された遺構には外周溝と建物址Ⅲ・Ⅳ号がある。

外周溝(図5・9・10・15)は北西隅で折れ、東と南に延び、北溝で40m、西溝で44mを調査しているが、さらに延びていることは確かめられた。そこより水田は一段下がり、排土の盛土をしたため、費用、期間の制約があって調査を打ち切っている。溝幅は最小で120cm、最大170cm、平均150cm前後、深さは20~30cmであり、覆土は図9・10の断面図でみるように上層に砂質の黒褐色土、その下に暗黒色土、暗黄褐色土となり、ローム層に掘りこまれているものであり、水を流した痕跡はみられない。外周溝は2辺の調査であったが、方形にめぐらし、遺構群Ⅱを区画したものとみられる。外周溝内側の遺構には建物址Ⅲ、Ⅳが発見されている。

建物址Ⅲ号(図14)外周溝西溝の東4mに発見され、2間×2間の掘立の建物址である。柱穴間隔は、1.8mであるが、東側中央の1つは異なる。縄文中期末の土塊8号・11号が掘りこまれている。建物址Ⅲ号の周辺には11この柱穴が検出されているが、その配置は不規則である。また東側には焼土塊が発見されている。全面はタタキ状の堅さで、遺構群Ⅰと類似する。

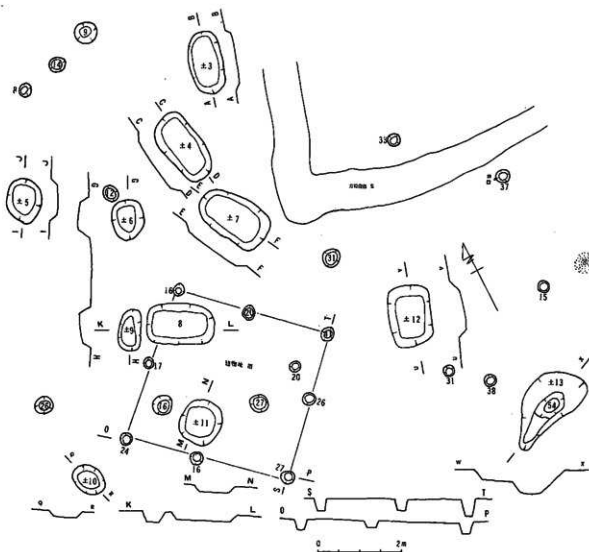
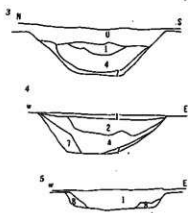
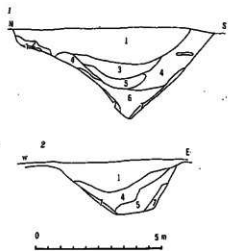
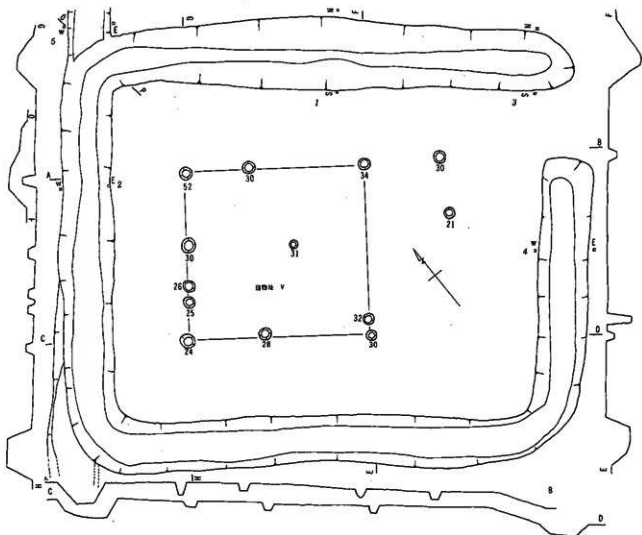


図14 宮ノ先遺跡建物址Ⅲ・柱穴群と土壌群

建物址Ⅳ(図15)Ⅲ調査区の南西端に発見され、外周溝西溝から東に延びる方形周溝がめぐり、その内側に南北6.6m(3.5間)×東西7.2m(4間)の方形の建物址が配されているが、東側は耕作による荒れと、水田造成時の埋土にもなっており、柱列は発見できなかった。また、土台石を置いたとも思われるが、その痕跡も残っていない。東側に2つ並ぶ柱穴は出入口の配置ともみられる。柱穴は径50~60cmと他遺構に比して規模は大きい。

南北17.1m(9間)×東西20.7m(11.5間)の隅丸方形に周溝をめぐらし、東隅に幅2.7m(1.5間)の陸橋をもち、そこより一段低くなっている。南と東溝は水田造成時に上層は削られ、原形を崩しているとみられるが、北と西溝では幅2m~2.3m、最大幅は2.85mあり、深さ70~110cmと大規模で薬研堀ともみられるものである。



- 地层编号
- 0 1 2 3 4 5 6 7
- 0 5m
- 图例如下：  
 1. 遗址 I (仰光)  
 2. 遗址 II  
 3. 遗址 III (仰光 - 仰光 300)  
 4. 遗址 IV (仰光)  
 5. 遗址 V (仰光 300, 350)  
 6. 遗址 VI (仰光)  
 7. 遗址 VII (仰光)  
 8. 遗址 VIII (仰光 300)

图15 宫ノ先遺跡建物址 IV

方形周溝墓Ⅰは周溝内側の柱列は発見されなかったが、その形態の建物址Ⅳとの類似性からみて、中世遺構群Ⅱの一面をなすものと考えられるものである。

遺物(図17の19~25)外周溝内よりの出土が比較的多く、内部遺構よりの出土は少ない。

外周溝よりは図17の19~24があり、山茶碗20・21は表面黄褐色を呈し、東濃産とみられ、19・22は灰褐色を呈し、自然釉が多くかかり、瀬戸周辺産のものとみられる。いずれも付高台で古い時期のものとみる。23の瓦は北溝東の出土で灰褐色を呈し、内面にタタキ面をもつ厚い瓦で中世のものである。24の鉄鏝は刃部と基部の角度が大きく開き、いわゆる薙鏝で、刃部が二段となる点に特色をもつ。図示外に天目茶碗・古瀬戸の壺・山茶碗の小破片等がある。

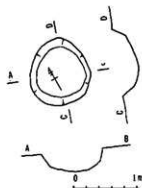


図16 宮ノ先遺跡土壇2号

外周溝内部遺構出土の図17の25の鉄鏝は建物址Ⅲに関連するとみる柱穴群よりの出土で長さ6cm、中央部幅2cmの大型であり、鏝の付着が多く基部の有無ははっきりしない。また、建物址Ⅲとその周辺より中世陶片数点の出土をみている。建物址Ⅳよりは古瀬戸壺片・山茶碗片・スリパチ片と火打石とみられる石英の破片3点が検出されている。方形周溝墓Ⅰの北溝及びその内側より天目茶碗・古瀬戸皿・古瀬戸壺・山茶碗等の小破片の出土をみている。

#### 4. 土 壇

I調査区で1号・2号が検出され、1号は1号住居址内に掘りこまれ、住居址土中にロームの盛土があって住居址より後のものとわかった。Ⅲ調査区で4号~13号の土壇群が調査されているが、13号は形態を異にし、時期的に不明であるが、他は縄文中期末の土器片と打石斧が上層より検出されている。土壇群は中世建物址Ⅲ号を中心とする柱穴群中において、その調査を先行したため上層の遺物を一括土壇群出土とした。土壇を次の一覧表にまとめた。

宮ノ先遺跡土壇一覧表

土壇No	図No	大きさ(図南北・東西)	深さ(cm)	形状	主軸方向	遺物	備考	時期	遺物No	
1	6	110×73	25	楕円形	N7°W	なし	1号住居址内に掘りこまれる	弥生終末 動土後		
2	16	105×95	33	円形	N18°E	なし		不明		
3	14	146×80	13	長楕円形	N18°W	土壇群縄文中期末 加曾利E式土器片 打石斧	土壇群	縄文中期	17	
4	"	170×90	15	隅丸長方形	N5°W	↓	"	"	"	
5	"	100×80	19	楕円形	N34°E		"	"	"	
6	"	94×85	25	"	N30°E		"	"	"	
7	"	172×104	15	隅丸長方形	N25°W		"	"	"	
8	"	98×112	15	"	N58°W		"	"	"	
9	"	96×55	24	長楕円形	N34°E		"	"	"	
10	"	80×60	17	楕円形	N16°W		"	"	"	
11	"	100×98	17	隅丸長方形	N52°E		打石斧刃部を欠く	"	"	"
12	"	134×100	24	"	N20°E		↓ 1	"	"	"
13	"	105×215	54	不整形の楕円形	N68°E		なし	2段に掘りこむ	不明	

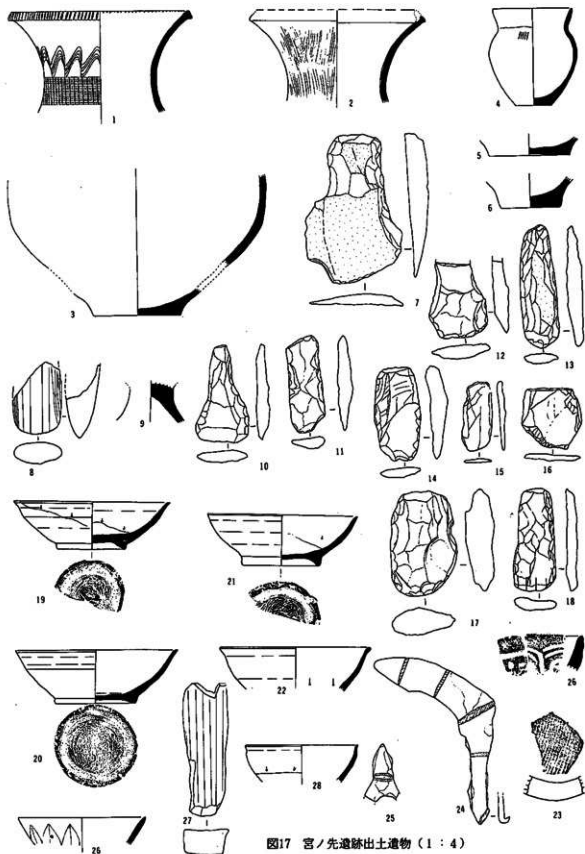


图17 宮ノ先遺跡出土遺物 (1 : 4)

(1~7...2号住居址, 8·9...方形周溝基I, 10~16·26...土壇群, 17·18...土壇II号)  
 19~25...外周溝, 26·27...屋敷跡跡伊裏内, 28...5住)

## IV 考

## 察

宮ノ先遺跡の発掘調査は用地内の約5,000㎡について行ったものであるが、Ⅱ調査区には遺構は発見されず、Ⅰ・Ⅲ調査区に集中して発見された。

弥生時代後期では、住居址3と方形周溝墓3基または2基が発掘調査されている。住居址は2号住居址を除いて小型であり、遺物も僅少であった。南側に大きな湿地帯をもち、水田耕作の適地とみる立地にあつて大きな集落が形成されていたとみられるが、住居址の発見数は少なかった。道路を隔てた南のⅡ調査区と、それにつながる東の水田のビット調査でも遺構は発見されず、Ⅰ調査区西の水田のビット調査でも遺構は検出されなかった。おそらくⅠ調査区から東に集落は展開したと思われるが、東側の畑はかつて壁土の採集地となつた所で既に遺構は破壊されており、さらに東は用地外となっている。

土器は2号住居址出土(図17の1~3)がその形態と文様を知ることができるものであるが、粘質土中の出土のため器肌は荒れている。1の壺は口縁部が短かく、震伏文をもつては座光寺原式であり、2の頸部から口縁部に細い条線(1)を施す壺に相当する場跡22号住居址出土例がある。3の小形甕は雁屋前遺跡7号住居址出土の寄道式土器に近似するもので、いずれも座光寺原式である。(2)

方形周溝墓は一応3基が発見されているが、1号は周溝規模は大きく、中世外周溝との切り合いでみる地層では区別しがたい。また、これは中世建物址Ⅳ号をめぐる方形周溝と外周溝にみる層序関係と同じである。また二者の方形周溝の主軸方向はN50°Wと同方向をさしている。主体部とみる土壌よりの遺物は縄文中期末の土器片と打石斧片の出土をみており、縄文中期の土壌かともみられる。周溝内側よりは中世陶器片の出土をみており、ただ周溝内出土の高坏脚部片を除けば中世遺構とみるが妥当とも思われる。

方形周溝墓Ⅱ・Ⅲ号は規模は小さく、Ⅱ号は中世外周溝によって切られており、主軸方向はN74°W、N80°Wと中世遺構群ⅡのN50°W前後とは異なる。遺物は弥生後期土器片を僅かに周溝内から検出しているが、器肌は荒れている。弥生後期住居址の存在、古墳時代の遺物のない点からみて、弥生後期の方形周溝墓とみたい。

宮ノ先の北に隣接する新川を隔てた一段下位にある中島平遺跡では昭和51年度調査で座光寺原式から中島式前半にいたる住居址15か調査されている。方形周溝墓主体部より鉄剣2口の出土をみた滝沢井尻遺跡、座光寺原式と寄道式的好資料を得た雁屋前遺跡(3)は西1,000mにある。天竜川の小支流の新川と白井川の兩岸の伊賀良扇状地面から一段低位となる舌状台地面にかけて弥生後期の集落が展開していたものとみられる。(4)

中世遺構では、Ⅰ号・Ⅱ号の大規模な遺構群が発見されている。遺構群Ⅰは囲炉裏をもつて独立建物址を中心に竪穴住居址・柱穴群よりなり、三和土状の堅い面によってその範囲を知ることができ、井水と道路となっている南側と、かつて壁土採取場となつた東側の畑に広がっていたものとみられる。囲炉裏以外に焼土はみられず、一連の建造物とみられる屋敷跡である。

遺構群Ⅱ号は方形になるとみる外周溝によって範囲が区画され、その内側に建造物をもつて遺構群である。外周溝の調査は北溝で40m、西溝で44mを調査しているが、一段低い水田へと続くことは確認されたが、そこに排土の盛土をし、費用、期限の制約のため調査を断念したことが今にして惜しまれる。外周溝内側に独立建物址Ⅲ・Ⅳが発見され、Ⅳ号は大規模な葉研掘ともみる方形周溝をめぐるし、東隅に段をもつた



とみる出入口となる陸橋がついている。構造物の区画は間を単位としている。

方形周溝墓Ⅰ号は、建物址Ⅳよりはやや小さくなるが大規模な方形周溝をめぐらし、そのあり方は類似し、その形態、遺物からみて、中世遺構群Ⅱに付いているものと推測されるものである。調査範囲約1,800㎡の範囲に、さらに東と南の未調査区に広がるとみる大規模な遺構群は館址と考えられるものである。

外周溝出土の山茶碗は古い時期のものである。遺構群Ⅰ一屋敷址出土の陶器片には室町後半のものがみられる。

鎌倉時代伊賀良庄地頭は北条時政であり、時政以後北条江馬氏が代々それを継いでいる。江馬氏の代官四條金吾頼基が殿岡に居を構えたことは文献上明らかであり、北条氏滅亡後伊賀良庄地頭は小笠原氏となり、その配下の武将を伊賀良の要所に置き、その一つが下ノ城である伝承がある。

地形的にみて、下ノ城地籍が西から南にかけての旧新川流路の湿地帯にとりかこまれ、北から東にかけて新川の浸蝕崖となり、この間に広がる舌状台地は館を構えるに好適な立地といえよう。飯田地方の代表的な松尾館址、知久平館址は湿地帯と段丘崖による防禦の地に立地している。

下ノ城構築前に地方豪族の館がここに構えられていたものと推測され、下ノ城構築後の有力武士の屋敷址の一つが中世遺構群Ⅰと推定される。下ノ城地籍宮ノ先遺跡の中世遺構群は今後に多くの課題を提示するものである。

下ノ城跡はすでに道路改修時に削りとられ、僅かに空濼跡の痕跡を残すのみとなり、その調査は不能となっていた。図版Ⅰにある石像は新川の堤防の根石になっていた岩に刻まれていたもので、昭和36年大水害の際押し流されて発見され、それを破って現在農家の庭に置かれたものであり、時代的にも不明であるが、一応注意すべき石像と思われる。

縄文中期末葉の遺構に土壙群が発見され、この期の土器片と打石斧が検出されているが、住居址の発見には至らなかった。おそらく台地の西側に集落が存在していたものと予想されるが、未調査に終わっている。広範囲にわたる農業構造改善事業による不十分ならざるを得ない調査のあり方を反省したい。

注1. 松川敬養「的場」1973

注2. 「長野県中央道掘原文化財包蔵地発掘調査報告書一 飯田地内 その2」昭和47年度

注3. 飯田市教委「伊賀良中島平」1977

注4. 注2に同じ

注5. 注2に同じ

注6. 宮下操「下伊那史第五巻」昭42

注7. 熊井泰蔵「室町時代の伊賀良」伊賀良村誌 昭48

おわりに、今次調査にあたって調査員吉沢輝人先生の献身的な御骨折り、大沢和夫先生、県文化課今村善興主事の御指導、神村透・宮沢恒之両先生の助言があり、作業にあられた方々の熱心な作業態度が大きな力となったこと、市農村課藤本照之技師、工事を請われた岩手屋建設のご理解、御協力のあったことを深謝したい。

(佐藤 雅 信)

図版 I 遺 跡



西から



西から 工事後



東から



東から 工事後



南西から



南西から 工事後



7 西北から



中島平遺跡を見下す



下ノ城跡の空堀の一部

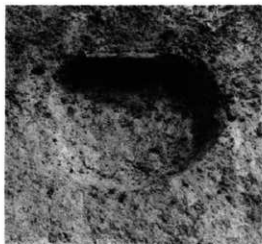


新川堤防根石の岩に刻まれた石像

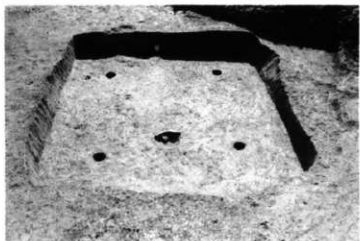
図版Ⅱ 遺構・遺物



宮ノ先1号住居址



宮ノ先1号住居址炉址



宮ノ先2号住居址



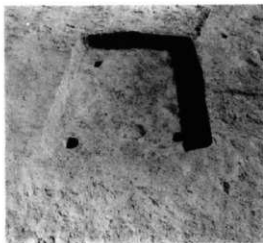
宮ノ先2号住居址炉址



宮ノ先2号住居址出土土器



宮ノ先2号住居址出土石礫(左)  
右は方形周溝墓1号周溝出土磨石斧



宮ノ先3号住居址



宮ノ先Ⅲ調査区遺構群 — 外周溝が北と西に延び内側に遺構群がある



方形周溝墓Ⅱ号



方形周溝墓Ⅲ号



方形周溝墓Ⅰ号 東から



方形周溝墓Ⅰ号 西から



中世遺構群Ⅰ 東から



中世遺構群Ⅰ 西から  
中央右は弥生後期2号住居址  
左上は3号住居址



中世遺構群Ⅰ 北から



中世遺構群Ⅰ 東から



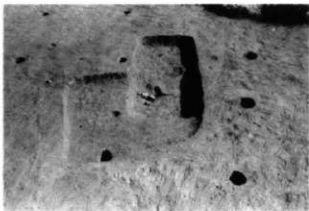
宮ノ先4号住居址 竪穴内部集石



宮ノ先4号住居址



宮ノ先5号住居址



中世建物址Iに付く竪穴



中世建物址IV 東から



宮ノ先IV調査区遺構群



中世建物址IV 西から



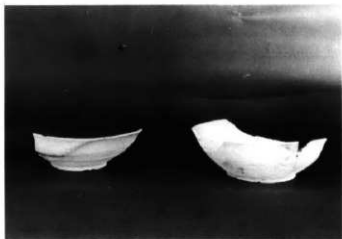
中世建物址(中央上)、外周溝の一部(右下)、土壌群



土壌群出土石器



中世遺構群I出土陶器片 — 左は常滑壺片



外周溝出土山茶碗



外周溝鉄鎌の出土



外周溝出土鉄鎌と建物址III出土鉄藪



図版Ⅲ 発掘スナップ



調査にかかる



1号住居址検出



中世遺構群Ⅰの調査



方形周溝墓Ⅰの調査



Ⅲ調査区の発掘はすすむ



Ⅲ調査区の発掘はすすむ

## 調 査 組 織

### 1. 伊賀良宮の先遺跡埋蔵文化財発掘調査委員会

平 田 英 夫	飯田市教育委員会委員長
勝 野 好 一	飯田市教育委員
沢 柳 俊 夫	"
大田中 一 郎	"
林 研 二	飯田市教育長
相 津 実	飯田市教育委員会事務局社会教育課長

### 2. 調 査 団

団 長	佐 藤 勉 信
調査員	吉 沢 輝 人

### 3. 指 導 者

大 沢 和 夫	飯田女子短大教授
今 村 善 興	長野県教育委員会文化課指導主事

### 4. 事 務 局

飯田市教育委員会社会教育課	
相 津 実	社会教育課長
山 下 舜 平	課長補佐 係長
熊 谷 里 恵 子	主事

### 5. 伊賀良地区農業構造改善事業担当課

農 林 課	課 長	関 島 昭 一	
"	耕地係長	小 林 衛	
"	技 師	中 村 俊 助	藤 本 照 之
"	"	松 下 文 昭	加 藤 潔

### 6. 作 業 員

北 村 重 実	福 島 明 夫	中 平 兼 茂	牧 内 住 子
拓 植 勝 次	水 野 幸 一 郎	田 中 信 夫	久 保 田 只 雄
宮 下 元 治	平 栗 光 司	平 田 ま さ み	熊 谷 ひ さ
吉 川 弥 生	柳 沢 八 重 子	平 沢 稔	三 石 利 男
春 日 豊	池 田 隆 雄	佐 藤 い な 江	田 口 さ な ん

## お わ り に

昭和51年度より始まった伊賀良三殿地区の農業構造改善事業は、52年度事業として下の城地籍が実施されることになった。各地に城と呼ばれる地名はたくさんあり古くから人が生活したものと考えられる。下の城もその一つであるので事前に事業担当部課と協議及び現地調査を行い、遺跡台帳登録の宮の先遺跡として埋蔵文化財発掘調査記録保存事業に着手した。

宮の先遺跡は51年度実施した中島平遺跡と川をへだてた南の台地で、遺跡散布地としての条件が整っているので数多くの遺跡が所在するものと考え慎重に発掘調査が進められた。

今回の事業費は1,400,000円で農業構造改善事業費の中から負担金として飯田市教育委員会が受け直轄事業として行い、発掘調査記録保存事業が大きな成果を残して完了しました。

この発掘調査は耕地（水田、桑園）であるため、秋の収穫の終わった後に開始しなければならない状況下であり、また天候に左右される要素も含まれているので多少問題はあったが、幸い土地所有者をはじめ関係各方面の方々の格別な理解と援助とご指導によって、計画した面積の調査が出来、貴重な資料等が発掘され感謝にたえない。

調査体制は、団長に佐藤勉信先生、調査員に吉沢輝人先生をお願いし、先生方の経験豊かな知識をもって終始献身的に協力をいただき、指導者の飯田女子短大教授大沢和夫先生、県教育委員会文化課指導主事今村善興先生には適切な助言をいただき、また報告書の執筆は団長の佐藤先生が終始熱意をもって当られ、ここに完了したことに対し深く敬意を表します。

昭和53年3月

飯田市教育委員会社会教育課

---

# 伊賀良宮ノ先

埋蔵文化財発掘調査報告書

1978.3

長野県飯田市教育委員会

---

印刷 憐秀文社

---

